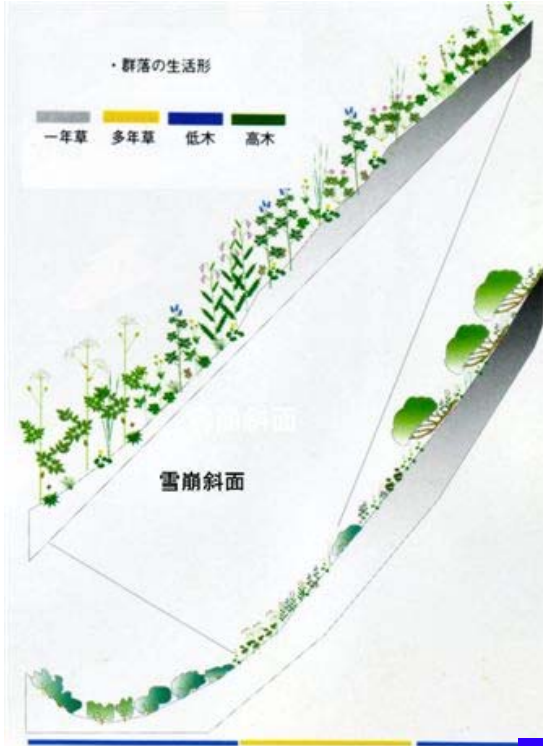


植物が教えてくれる雪崩の巣

冬山は雪崩が怖い。雪山に雪崩はつきもの、特に春先の底雪崩は破壊力が大きい。針葉樹林帯の斜面に、草原の広がりを見たら、そこは雪崩の頻発するところ。草原の中に見えるダケカンバの明るい茂みは、そこが雪崩のやや弱いところであることを示しています。雪崩の影響の少ない尾根の針葉樹林にくらべて、広い草原とダケカンバのあたりは、冬には雪崩の頻発する地域であることを植物が教えてくれます。

冬山登山に備えて、これ等を見下して地図などにプロットしておくことをお勧めします。



低木林と雪崩斜面

冬の高山に毎日のように降り積もる雪は、平野部のように、根雪となって春まで静かにその場にありません。尾根筋の雪は烈風に吹き飛ばされ、稜線に巨大な雪庇をつくり、凹地に吹きたまります。度を超えると、時折轟音とともに山の斜面を走って針葉樹林になだれ込み、これを侵食します。毎年雪崩の頻発するような斜面の針葉樹は、このエネルギーによってなぎ倒され、ダケカンバなどのしなやかな幹を持った広葉樹だけが耐えて生き残ります。

針葉高木樹林の終わるあたりに発達する、これらの低木が生えて林をつくる斜面のことを、雪崩斜面と言います。普通、南や西に向けた明るい雪崩斜面にはダケカンバが多く、東や北向きで日射量が少なく湿りがちのところでは、ミヤマハンノキが支配的となります。

特にダケカンバ林の夏は、明るくてさまざまな広葉草本が入り込み、花に満ちていることが多ようです。ところで毎年冬になると、雪崩による訃報を耳にします。冬山をやる人は、木があるからといって、油断大敵。ダケカンバやミヤマハンノキのある高山の斜面こそは、雪崩の通り道、地獄の入り口でありま

す。

雪崩斜面の低木林は、ダケカンバーミヤマキンポウゲ群綱のうちの、オオバタケシマランーミヤマハンノキ群目に分類されています。

- 1 高い山の頂上付近で降る雪は稜線の東に吹き溜まり、巨大なひさしのように風下に伸び壊れると大きなかたまりのまま落ちて各種の雪崩を引きこす。
- 2 積雪の層になにかアンバランス、不連続があると、そのはずみで雪が滑り始め、規模と勢いを増しながら猛スピードで落ちてゆく雪くずれ。表層だけが崩れる表層雪崩、底から全部が崩れ落ちる底雪崩、春先に大きなかたまりとなって崩れ落ちるブロック雪崩などの型がある。いずれも斜面の沢や凹状斜面に起こるが、冬山では天候の急変に伴って起き、しばしば遭難さわぎが起こる。
- 3 イネ科型の細長い葉の草本に対し、それ以外の幅広い葉を持つ草本。特に低木林は適湿、肥沃、日照量豊かなため、これらが密集して大きく育つ。
- 4 安全に見える小高い尾根筋でも針葉樹がなく、これらの低木林しかない場合はまた危険。完全に針葉高木樹林の中に入ってしまうと安全といえる。

雪崩に耐えて生きるダケカンバとミヤマハンノキ

植物の中には、祖先を同じくするふたつのグループが並行的によく栄えて、同じような地域に共存している場合がある。カバノキ属とハンノキ属の場合もそれに近い。双方とも湿地、崩壊地などの環境を好み、ダケカンバは南や西に向けた明るい雪崩斜面に、ミヤマハンノキは北や東に向けた湿った雪崩斜面に適応している。

ダケカンバ (カバノキ科カバノキ属)

ミヤマハンノキ (カバノキ科ハンノキ属)

